

# CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.148 October, 2020

## 目次

### 〈アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ〉

- CAPS主催・朝日新聞社後援  
CAPS & 朝日新聞国際報道部共同企画  
「コロナ時代の世界」を開催します.....1
- 〈2020年度 新規プロジェクトの紹介〉  
「Disaster Literature」(災害文学)の可能性  
文学部教授 庄司 宏子.....2
- 「多様性の時代—日本の英語教育を考える」  
文学部教授 小野 尚美.....3

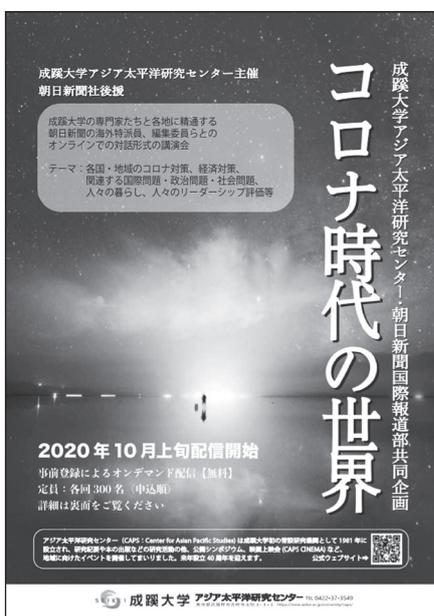
### 〈シリーズ 本を読む〉

- 永田和宏著『知の体力』  
理工学部教授 戸谷 希一郎.....4
- 〈受け入れ図書紹介 ~日米関係、日韓関係ほか~〉.....5
- 〈CAPS活動報告〉.....6

## アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ

### CAPS主催・朝日新聞社後援

### CAPS & 朝日新聞国際報道部共同企画「コロナ時代の世界」を開催します



今秋、CAPSは、朝日新聞国際報道部との共同企画『コロナ時代の世界』を開催いたします。全6回のオンラインでの対話形式の講演会で、成蹊大学の専門家たちが各地に精通する朝日新聞の海外特派員、編集委員らと多様なテーマで議論します(2020年10月上旬よりオンデマンド順次公開、定員：各回300名)。お申込・詳細についてはCAPSウェブサイトに掲載しております。皆さまのご参加をお待ちしております(<http://www.seikei.ac.jp/university/caps>)。

第1～6回の対象地域と出演者は以下の通りです。

- 第1回／2020年10月上旬／欧州・英国／朝日新聞ヨーロッパ総局長 国末憲人・成蹊大学法学部教授 今井貴子・成蹊大学法学部教授 板橋拓己
- 第2回／2020年10月下旬／中国／朝日新聞中国総局長 西村大輔・成蹊大学法学部教授 井上正也
- 第3回／2020年11月上旬／イタリア／朝日新聞ローマ支局長 河原田慎一・成蹊大学文学部教授 川村陶子
- 第4回／2020年11月下旬／アメリカ／朝日新聞アメリカ総局長 沢村互・成蹊大学法学部教授 西山隆行
- 第5回／2020年12月上旬／アジア・中国／朝日新聞編集委員 吉岡桂子・成蹊大学法学部教授 遠藤誠治
- 第6回／2020年12月下旬／総括／朝日新聞GLOBE編集長 稲田信司・成蹊大学法学部教授 アジア太平洋研究センター 所長 高安健将

## 2020年度 新規共同研究プロジェクトの紹介

## 「“Disaster Literature” (災害文学)の可能性」

文学部教授 庄司 宏子

本研究「災害文学の可能性」は、6名の文学研究者、学外メンバーでは戦後ドイツ文学の植松なつみさん、日本文学の木村朗子さん、ポーランド文学・比較文学の西成彦さん、環境文学の結城正美さん、それに学内の英語文学の小林英里さんとアメリカ文学の庄司宏子で今年度から始めた共同研究プロジェクトである。それぞれが研究対象とする「災害」も、ホロコースト、戦争、震災、環境破壊、人種的不正義など表面上の現象は異なっているが、地球上で起こった、あるいは今その渦中にある災害を描く文学を、言語圏・地域横断的に論じる枠組みを構想することを共通テーマとする。コロナ禍のなかオンラインで研究会を行っている。

この共同研究の構想は、プロジェクト責任者の庄司が昨年度一年間過ごしたUCバークレーでの長期研修から得たものである。リベラルな土地柄で知られるバークレーであるが、“redlining”で知られるかつての人種別住宅隔離政策の名残があった。2019年はヴァージニア植民地に初めてアフリカ大陸から奴隷とされた人々の到来から400年目の年で、『ニューヨーク・タイムズ』で“The 1619 Project”が組まれたり、ピューリッツァー賞を受賞するコルソン・ホワイトヘッドの『ニッケル・ボーイズ』やタナハシ・コーツの『ウォーター・ダンサー』などNeo-slave narrativesと称される小説が出版されるなど、現在に続く奴隷制度の爪痕が問われていた。UCバークレーでは、人文学と社会科学の両面からアメリカ社会の人種的不正義の問題と取り組む研究がなされていた。刑務所における大量拘置の問題から世界に広がるブラック・ディアスポラまで、多くの研究会や講演会が学生、専門家、一般の人が集ってオープンに議論されていた。奴隷制時代から続く人種をめぐる制度的不平等はBlack Lives Matter運動や下院公聴会

で“reparation”（賠償）として取り上げられるなど、終わらない「災害」として捉えられていた。

奴隷制度は大航海以降に始まる植民地支配やグローバル資本主義と深く結びついている。ヨーロッパによって収奪された新世界でアフリカから運び込まれた労働力によってサトウキビやコーヒーなどの換金作物が栽培された。植民地の独立や奴隷制廃止後も利潤を生む収奪システムは形を変えながら存続しグローバル商品を作り続けている。グローバル資本主義によるエネルギー、環境、労働などの資源の蹂躪の暴力、数百年にわたるそのシステムの破壊性が、環境破壊や異常気象、戦争や地域紛争、震災

と原発事故、そして地球規模の感染症の出現という形で噴出し、人類はその解決法を見い出せていないというのが21世紀の姿であるだろう。そうした時代と文学研究はどのように向き合わねばならないか。災害文学は、忘却されてきた人間と災害との関わりを再び記憶の場に呼び起こす。しかし過去の記憶の呼び起こすだけでは十分ではない。今アメリカで起こっている奴隷制の残滓である南軍旗や南部連合軍の将軍像の撤去問題は、それらを公的空間から取り除くだけでは終わらない。空いたスペースにいかなる新たな歴史を創造するのかが真に問われる。われわれの「災害文学の可能性」プロジェクトも、災害の根源にあるシステムの向こうをみる視線をもちたい。



## 「多様性の時代—日本の英語教育を考える」

文学部教授 小野 尚美

本研究プロジェクトは、『多様性の時代—日本の英語教育を考える』という題目で、小学校と大学での英語教育における問題点を提起し、その解決方法について調査を実施し、日本の英語学習者の能力向上のための効果的な指導方法を開発することを目指しています。研究期間は、2020年4月から2023年3月まで3年間で、それぞれの視点から上記の課題研究に取り組んでいる4つの小グループ(小野グループ、平山グループ、小林グループ、ラルフグループ)から成る共同研究です。

小野グループ(小野尚美:成蹊大学、田縁真弓・吉本連・オーガスティン真智:ノートルダム学院小学校)では、2020年度から小学校5年生及び6年生の英語の授業で英語の読み書き指導が始まったことを受けて、その指導法開発を行っています。中学から本格的に始まる英文読解の前の重要な読みのためのStorytelling活動を使って、効果的に小学生の英語の読み書き能力を養成する指導法を開発するために、実際に私立小学校で研究授業を行いながら、授業観察と振り返りの分析を実施しています。

平山グループ(平山真奈美:成蹊大学、馬場今日子:金城学院大学、増田斐那子:成蹊大学)では、日本語を母語とする英語学習者の英語の発音が、彼らの英語の読解能力とどのような関係があるかを研究しています。発音は、言語を操るための基本的かつ大変重要な要素であり、英文読解をする際も、音の理解や素早い処理が必要だと言われています。では、英文を読んで理解する力と、英語の発音が「できる」ことには何か相関関係があるのでしょうか。また、英語の発音をトレーニングすると読解能力も伸びるのでしょうか。このような問いに答えるため、私たちは、大学で学んでいる日本語母語話者を対象にして実験を行い、研究成果を発信する予定です。この研究によって、第二言語学習者の学習メカニズムの解明に一步近づき、研究結果が英語教育の現場で応用されるなど、教育の現場に貢献ができればと思っています。

小林グループ(小林めぐみ:成蹊大学、岡崎啓子:成蹊小学校)では、昨今急速に普及しているオンラ

イン英会話サービスの導入が、受講者の英語力や多様な英語に対する理解にどのような影響をもたらすのか、その効果と課題を検証します。オンライン英会話によって、これまで限られていたアウトプットの機会が各段に拡充され、世界各国の講師との交流が可能になりました。現在成蹊学園では小中高大で同じオンライン英会話サービスを試験的に導入しており(大学は正規導入)、本研究では、まず小学校と大学でそれぞれオンライン英会話の実施前後の英語力・学習意欲、ノンネイティブの講師に対する態度(World Englishes・多様性への理解)に変化があるかなどを客観テスト、学習記録、アンケートなどから見ていきます。英語学習は長期にわたるため、オンライン英会話導入における小学校と大学の段階での違いや配慮すべき点などについても提言ができればと思います。

ラルフグループの研究テーマは、“Text, Music, Image: Critical Approaches to Issues in Authenticity”です。以下はその概要となっています。

My research considers the question of how to develop, deliver and assess interdisciplinary, tertiary-level education on ideas of authenticity and culture. Such a discussion begins with an exploration of the concept of “the authentic” itself, through a look at various definitions, then turns to the examination of a group of thinkers whose work creates a theoretical framework. It also draws on best-practice models in other contexts, such as institutions in different countries.

An important part of the research involves interaction with other approaches to cultural authenticity, post-colonialism and contested identity. Through connections with the United Nations and the International Human Rights Commission, I hope to be able to spend some time in Kenya in the 2021 academic year, interacting with academic staff at the University of Nairobi.

In my research, three levels for discussing a

text can be offered as a methodology. The first considers the text itself as a self-contained object. The second looks at the text in terms of its connection to other, related texts. The third

problematizes the text in a broader context, embedded within culture as a whole. At each level, an interdisciplinary approach can be applied.

## シリーズ 本を読む

永田和宏著『知の体力』（新潮新書、2018年）

理工学部教授 戸谷 希一郎

日常を一変させたCOVID-19の感染拡大は、様々な困難をもたらしているが、「当たり前」を見つめ直す機会としてポジティブに受け止めたい。私たち大学教育に携わる者は、大学の在り方や若者への啓発について、何を見つめ直したら良いのだろう。本書の著者は、細胞生物学者／歌人／大学教授のいずれにおいても一流という、異色の経歴をもつ知の巨人である。著者が時にサイエンスを例にとり、また一方で言語や文化を例にとり、若者の素養として説く「知の体力」を通して、我々が目指す地平について考えたい。

著者は高校までの勉強を「学習」、大学での勉強を「学問」として区別している。学習には答えがあり、教える教師と教わる生徒という役割分担が明確である。一方、学問は教わるという一方的な知の流れではなく、教わった知をいったん堰き止めて、その価値を問い直す点で態度姿勢が異なると説く。実社会の問題において、ひとつの絶対的な答えがあるものは皆無である。広辞苑では「問題」の意味として、①問いかけて答えさせる題。解答を要する問い、②研究・議論して解決すべき事柄、③争論の材料となる事件、④人々の注目を集めていること、が挙げられている。このうち答えがあるのは①だけである。大学時代は、答えがある高校教育と答えがない実社会とのバッファー期間であるという。では、大学で若者はどうのように実社会に耐える知を身につけるのだろうか。

問いがあっても答えがない未経験の宙吊り状態に耐える知性。答えがないことを前提に自分なりの

答えを見つけようという意志。それらに目覚めさせるのが大学の役目であるようだ。運動に基礎体力が必要なように、実社会の想定外に対処するには「知の体力」が必要だと著者は言う。「知の体力」とは、想定外の問題に自身の知の片々を動員して、いかに乗り切るか再構成するための知の活用の仕方と定義している。「知の体力」は自身の可能性を

規定せずに、学問に能動的に取り組む姿勢から獲得されるという。学問によって自己を様々な角度から見る視線を獲得できれば、それは個人が世界と向き合う基盤となる。その上で、「そこそこいいか」といった安易な自己規定や、「友達と一緒にいい」といった同調の強要から解放されて、批判精神や多様性、可能性を信じた過ごし方が大切と説く。「そこそこ」の自己評価を与えず、敢えて自分を宙吊りの未決定状態におき続けることは、何かのきっかけ

で一気に物事に邁進する推進力となる。気の合う友人だけでなく、考え方が違う友人との巡り会いは、自分の別の面（可能性）を教えてくれる。友達と違う孤独感や周囲との葛藤の中で、自らの可能性や個性の芽が育っていく。

人生の選択において、「面白い」方をとるか、「安全」な方をとるかは、生き方に大きな意味をもつ。常に安全な方を選択すると、人生は小さなものになっていくであろう。若者が「面白い」方を選択するには、大人の後押しも必要だと著者は説く。自身での模索には失敗がつきものだが、子が果敢な失敗に挑むときに、親や教師が救いの手を差し伸べ、失敗の芽を摘んでしまうことは、成功への道



を開ざす。手を差し伸べてなされる成功体験は、安易な依存体質の形成に繋がるだけだという。最近の大学は文科省や親の求めに応じて、質の保証や面倒見の良さに傾倒している。大学に質保証を求める一方で、個性的な学生の出現を望むなど自己矛盾である。大学は何かを保証する場ではなく、個々の学生の可能性を開く場であるというのが著者の主張である。

著者は最後に「知の体力」で得た素晴らしい成功も、心から喜んでくれる人がいなければ意味がな

い、それと同時にちょっとした自分の行為を褒めてくれる存在があると、自分が輝きに包まれていることを感じるものだと説く。ぜひそんな心から愛する人に出会って、それ以前に自覚しなかった「輝いている自分」を見つけてほしい、と結んでいる。大学教育に携わる我々は、若者が「知の体力」を獲得し社会で輝くために、自問自答や試行錯誤を促し、出会いや別れがあり、自由で余裕があり、挑戦や可能性を妨げない場を提供したいものである。

### 受け入れ図書紹介 ～日米関係、日韓関係ほか～

CAPSでは毎年、アジア太平洋地域に関する多様なテーマで図書を受け入れています。成蹊大学図書館OPACから検索できます。学生・教職員とも資料の貸出が可能です(学生証・教職員証必要)。

【2019年度新着リストより抜粋】

	書籍名	編著者	刊行年／出版社
日米関係ほか	ニクソンのアメリカ：アメリカ第一主義の起源	松尾文夫	2019 / 岩波現代文庫
	アメリカ左派の外交政策	マイケル・ウォルツァー	2018 / 風行社
	在米被爆者	松前陽子	2019 / 潮出版社
	パックスアメリカーナのアキレス腱：グローバルな視点から見た米軍地位協定の比較研究	佐々山泰弘	2019 / 御茶の水書房
	冷戦期アメリカのアジア政策：「自由主義的国際秩序」の変容と「日米協力」	菅英輝	2019 / 晃洋書房
日韓関係ほか	歴史認識から見た戦後日韓関係：「1965年体制」の歴史学・政治学的考察	吉澤文寿編	2019 / 社会評論社
	「反日」と「反共」：戦後韓国におけるナショナリズム言説とその変容	崔銀姫	2019 / 明石書店
	「徴用工問題」とは何か？：韓国大法院判決が問うもの	戸塚悦朗	2019 / 明石書店
中国	韓国ジャーナリズムと言論民主化運動：『ハンギョレ新聞』をめぐる歴史社会学	森類臣	2019 / 日本経済評論社
	現代中国の社会と行動原理：関係・面子・権力	翟学偉	2019 / 岩波書店
	中所得国の罫と中国・ASEAN	苺込俊二 トラン・ヴァン・トウ	2019 / 勁草書房
香港	中国の少数民族教育政策とその実態：新疆ウイグル自治区における双語教育	アナトラ・グリジャンティ	2015 / 三元社
	香港危機の深層：「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ	倉田徹・ 倉田明子編	2019 / 東京外国語大学出版会
境界・移動	不穏なフロンティアの大戦略：辺境をめぐる攻防と地政学的考察	ヤクブ・グリギエル A. ウェス・ミツェル	2019 / 中央公論新社
	地域から国民国家を問い直す：スコットランド、カタルーニヤ、ウイグル、琉球・沖縄などを事例として	奥野良知編著	2019 / 明石書店
	戸籍と無戸籍：「日本人」の輪郭	遠藤正敬	2017 / 人文書院
	引揚・追放・残留：戦後国際民族移動の比較研究	蘭信三他編	2019 / 名古屋大学出版会
美術・表現	あいちトリエンナーレ「展示中止」事件：表現の不自由と日本	岡本有佳他編	2019 / 岩波書店
	現代美術史：欧米、日本、トランスナショナル	山本浩貴	2019 / 中央公論新社
	美術手帖 2019年12月号 特集「移民」の美術		2019 / 美術出版社
	麒麟の子：鳥居歌集	鳥居	2016 / KADOKAWA
	滑走路：歌集	萩原慎一郎	2017 / KADOKAWA

## CAPS 活動報告 (2020.6.16 ~ 2020.9.15)

## 1. 公開講演会、研究会等

～オンライン映画上映会【CAPS CINEMA】～  
 <多様なテーマの17作品がオンデマンドで視聴可能>

開催日	2020年6月1日(月)～2021年3月31日(水)
登録人数	405名(9月15日現在、先着1,000名) ※対象者：成蹊大学学生・教職員
視聴可能作品	『タシちゃんと僧侶』『第4の革命』『台北カフェ・ストーリー』『happy—しあわせを探すあなたへ』『バレンタイン—掬』『ヴィック・ムニーズ／ごみアートの奇跡』『バベルの学校』『それでも僕は帰る～シリア 若者たちが求め続けたふるさと～』『ザ・トゥルー・コスト～ファストファッション 真の代償～』『七転び八起き—アメリカへ渡った戦争花嫁物語』『ダムネーション』『ボバティー・インク～あなたの寄付の不都合な真実～』『0円キッチン』『ワンダーランド北朝鮮』『ナディアの誓い—On Her Shoulders』『アレッポ 最後の男たち』『おくじらさまふたつの正義の物語』
配給会社	ユナイテッドピープル(株)

## ～プロジェクト研究会～

開催日	2020年8月11日(火)・9月7日(月)
プロジェクト名	「災害文学」の可能性
講演者	結城 正美 (青山学院大学教授) ※9月7日のみ
参加者	6名(講演者含む)

開催日	2020年8月12日(水)
プロジェクト名	多様性の時代—英語教育を考える
参加者	3名

## 2. 研究出張

～国内出張～ ※No.147掲載内容に追加

期間	2020年5月1日(金)～5月2日(土)
プロジェクト名	ヒ素超蓄積植物モエジマシダバイオマスを利用した新規環境浄化資材の開発
出張者	菅原 一輝(理工学部助教)
行先	福島県
目的	実験用サンプルの収集

## 3. 会議の記録

開催日	2020年6月17日(水)
会議名	運営委員会(ZOOMによるオンライン会議)

開催日	2020年7月20日(月)～25日(土)
会議名	所員会議・運営委員会(メール会議)

開催日	2020年8月27日(木)～9月3日(木)
会議名	臨時所員会議・臨時運営委員会(メール会議)

## CAPS Newsletter No.148

2020年10月15日発行

編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター  
 〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>

CAPSの公式ウェブサイトは  
 コチラ→

